

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24402030

研究課題名(和文) 東北タイの開発と市民社会形成 公共圏・社会関係資本・プラチャーコム(住民組織)

研究課題名(英文) Civil Society Movement and Development in Northeast Thailand -Public sphere, Social Capital and Prachakhom-

研究代表者

鈴木 規之(SUZUKI, Noriyuki)

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：60253936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、東北タイの開発・発展のあり方をその主体や方向性の議論の中でタイの学界で大きく注目されている市民社会概念に着目し、市民社会の基盤となるプラチャーコム(住民による小グループ)を調査・研究することにより市民社会形成のプロセスを実証的に明らかにすることである。2006年のクーデター、2010年の赤服と黄服の対立による流血事件、2014年の赤服と黄服がもたらした混乱の中でのクーデターは、東北タイにおいてマクロレベルの変動とミクロレベル(プラチャーコム)のリンクが改めて問われることとなった。本研究では公共圏や社会関係資本も考慮に入れてプラチャーコムのダイナミズムを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This is a result of research on village civil society (prachakhom) as the basis for the emergence of civil society and development in Thailand's northeastern region. We concluded that prachakhom was the foundation of the formation process for Civil Society. Prachakhom as a gathering of people has been an integral part of Thai society, while the civil society movement was a new idea derived from the West. In this research, we intend to analyze many aspects of civil society movement from the perspective of public sphere, social capital and prachakhom using quantitative and qualitative data.

On 22 May 2014, the Royal Thai Armed Forces launched a coup d'etat against the caretaker government of Thailand. The military established a junta called National Council for Peace and Order to govern the nation. It is necessary to consider the influence in the formation process for civil society, especially village civil society, prachakhom.

研究分野：国際社会学

キーワード：東北タイ 市民社会 住民組織 プラチャーコム 公共圏 社会関係資本 開発・発展 2014年クーデター

1. 研究開始当初の背景

タイにおける開発と市民社会形成の研究は、1992年の5月大殺戮事件以降、政治学・経済学などの社会科学者達の間で民主化を含めたタイ社会のあるべき姿を構想する中心のテーマとなった。とりわけ、社会学の分野では、2000年の第1回タイ全国社会学会での「市民社会とは何か?」というテーマ設定から2003年の第2回には「市民社会の形成はいかにして可能か」がテーマとなり、住民による小グループであるプラチャーコムが市民社会を成立させるとの問題意識からプラチャーコムの個別的な研究へとテーマ設定が動いてきた。2006年の第3回でも成功したプラチャーコムの事例がかなりとりあげられたが市民社会の可能性の議論までは至らなかった。

プラチャーコムは、もともとタイ語で人々の集まりを意味するが、市民社会を表すプラチャーサンコムが外来の概念としてタイ語に導入されたため、タイの文脈における市民社会形成研究のキーワードとなってきた [Suzuki: 2003 in Somsak and Sakurai]

2006年のクーデターによるタクシン政権の崩壊後は、草の根的なプラチャーコムを形成した地域では動揺が少なく、主体性を今後もどの様に発展させていくかという流れが続いている。一方で上から形成されたプラチャーコムがほとんどである地域は、タクシン政権の崩壊とともにほぼプラチャーコム(小グループ)の活動は壊滅状態になり、次の政権が何を行うのか、もしくはタクシンの復活に期待するという状況となった。鈴木を研究代表者とする平成17年度~19年度の科研(B)(海外)のプロジェクトでは、ここまでの動きを明らかにして、コーンケン大学より出版した [Suzuki and Somsak: 2008]。そして、平成20年~22年度の科研(B)(海外)のプロジェクトでは、2006年クーデター以降の状況について調査研究を行い、タイと日本での国際セミナーを開催した。その成果は *Dynamics of Civil Society in Thailand* として2012年にコーンケン大学より出版された [Suzuki and Somsak: 2012]

2010年5月の流血事件後、9月にコーンケン大学において第4回タイ全国社会学会のための東北タイセミナーが開催され、タイ学術評議会(NRCT)の社会学の代表者であるスリチャイ・ワンゲーオは、社会の対立を緩和させるための公共圏でのコミュニケーションの重要性を指摘し、市民のもつ社会関係資本を総動員するべきと強調した。本研究はこれまでの成果とスリチャイのこの問題意識を統合させて、さらに発展させるものである。

Noriyuki Suzuki, "Recent Development and Formation of Civil Society in Northeastern Thailand", Somsak Srisontisuk and Yoshihide Sakurai (eds.), *Regional Development in Northeast*

Thailand and the Formation of Civil Society, Khonkaen University Book Center, pp.19-51. 2003.

Noriyuki Suzuki, Somsak Srisontisuk(eds.), *Civil Society Movement and Development in Northeast Thailand*, Khon Kaen University Book Center, Khon Kaen, 2008, 372 p.

Noriyuki Suzuki, Somsak Srisontisuk(eds.), *Dynamics of Civil Society Movement in Northeast Thailand*, Khon Kaen University Book Center, Khon Kaen, 2012, 399 p.

2. 研究の目的

本研究の目的は、東北タイの開発・発展のあり方をその主体や方向性の議論の中でタイの学界で大きく注目された市民社会概念に着目し、市民社会の基盤となるプラチャーコム(住民による小グループ)を調査・研究することにより市民社会形成のプロセスを実証的に明らかにすることである。2006年のクーデター、2010年の赤服と黄服の対立による流血事件は、開発と市民社会形成のあり方に再考をうながした。2011年7月の総選挙で赤服の支持するインラック政権が誕生したが、赤服の活動が最も活発だった東北タイにおいてマクロレベルの変動とミクロレベル(プラチャーコム)のリンクが改めて問われることとなった。本研究ではタイにおける公共圏のあり方や社会関係資本の特質も考慮に入れて分析をすすめたい。

本研究では、平成20~22年度の科研に引き続いて、現在のタイで市民社会化の動きがどの程度の可能性をもつものなのか、このようなプラチャーコムがどのように構築されるのか、メディアや教育はどのような役割を果たすのか、一方で政府のトップダウン的な政策で構築されるプラチャーコムが多い中で草の根に住民のイニシアティブで構築するための条件は何かを実証的に明らかにした上で、プラチャーコムが市民社会形成の基盤になりうるのかを改めて明らかにしたい。

また、クーデターや赤服・黄服の対立による2010年5月事件が起こるようなタイ社会においてマクロレベルとミクロレベルで市民社会の動きがどのように接合するかも明らかにしていきたい。

さらにグローバル化の流れの中で国境をこえたプラチャーコムのネットワークや社会関係資本(Social Capital)、公共圏でのコミュニケーションの重要性についても調査を進めたい。

開発と市民社会の研究はタイの社会科学研究者にも大きな関心を集め、潮流をリードする理論家であるティラユット・ブンミーの「市民社会とは何か」といった研究や、「市民社会はいかにして可能か」といったプラウエート・ワシーらの研究と、多くの社会学者によるプラチャーコムの研究が出版、発表さ

れているが、この2つをつなぐ問題意識すなわち「市民社会はどのようなプラチャーコムが基盤となって形成されるか」という議論はいささか不足していると言わざるを得ない。また、グローバル化の中でのプラチャーコムのネットワーキングや社会関係資本についての研究も少ない。しかし、クーデターや赤服と黄服の対立による2010年の5月事件が起こり、2011年の7月総選挙でタクシンの妹であるインラック政権が誕生した今、このテーマは重要性を増してきた。現在のところ、シャツの色分けと政治的主張、階層・地域間対立が微妙に入り組んでおり、政治学的な単純な構造分析だけでは問題の解明に至らないため地域の実態に即した社会学的調査が必要である。本研究は、研究代表者や研究分担者、海外共同研究者たちの研究の調査、業績からこれまでの研究の欠如を補い、マクロレベルとミクロレベルの変動をつなげていくところに特色がある。そして、東北タイの公共圏・社会関係資本・プラチャーコム（住民組織）の3つの側面から開発と市民社会形成を実証的に研究することに大きな意義がある。（注：赤服はタクシン派、黄服は反タクシン派である。）

3. 研究の方法

社会開発の流れのなかで極めて重要な位置を占めるようになった市民社会形成について、その基盤となるプラチャーコム（小グループ）をどのように住民が構築してきたかを公共圏のあり方や社会関係資本の特質を考慮に入れつつ量的・質的な調査を通して明らかにする。1年目は主に予備調査を、2年目は本調査を、3年目は補足の調査を行う。そして、成果の還元のために沖縄（琉球大学）とコーンケン（コーンケン大学）においてシンポジウムを行い、日本語・タイ語・英語で報告書を作成する。具体的には、東北タイのコーンケン県およびその周辺であるウドンタニ県、スリン県、ルーイ県などの都市と農村において、社会開発のダイナミズムおよび社会開発と市民社会化への動きについて調査を行なう。

市民社会形成の基盤となるプラチャーコム（小グループ）が数多く、また効果的に構築されている開発・発展のため、タイ側の共同研究者とともに自立をめざすグループ、高齢者のグループ、障害者のグループ、公衆衛生のグループについて調査を行う。調査をもとに社会開発とプラチャーコム、市民社会についてのモデルを作成し、東北タイとの現状との整合性を研究する。1年目のこの作業から、2年目の本調査のためのフレームワークを設定し、本格的な市民社会の基盤となるプラチャーコムの調査に入る。

4. 研究成果

本研究チームは、琉球大学を中心とする日本側チームと学術交流協定締結校であるコ

ーンケン大学を中心とするタイ側カウンターパートによって構成されている。日本側チームは、鈴木規之（研究代表者）、櫻井義秀、佐藤康行、岩佐淳一（研究分担者）の他に、若手研究者の泉経武、浦崎雅代を研究協力者として加えた。研究代表者と研究分担者は社会学を専門としている。

タイ側は、ソムサック・シーサンティスックを中心に、プラチョン・キンミンハー、ケオター・チャントラヌソン、ケラティポン・ジューターウィリヤ、サシプラパー・チャントアウォン、ラッチャノック・チャムナン・マークで、いずれもプラチャーコムを基盤とした研究を行っている社会学や開発学などの専門家である。

研究をすすめるために、以下の日程で研究会、セミナー、国際シンポジウムを行った。

2012年9月10日

コーンケン大学人文社会科学研究所においてキックオフセミナー

2013年1月26～27日

琉球大学法文学部附属アジア研究施設において国際セミナー

2013年9月18日

コーンケン大学人文社会科学研究所において小セミナー

2014年1月25～26日

琉球大学法文学部附属アジア研究施設において国際セミナー

2014年8月30日

コーンケン大学人文社会科学研究所において小セミナー

2015年1月31日～2月1日

琉球大学法文学部附属アジア研究施設において国際シンポジウム

以下は2015年1月31日～2月1日、琉球大学において開催された国際シンポジウム“Social Development in Northeast Thailand and Laos -Public sphere, Social Capital and *Prachakhom*—”で研究成果として報告された paper である。

1. Civil Society Movement and Development in Northeast Thailand —Public Sphere, Social Capital and *Prachakhom*— (Dr. Noriyuki Suzuki)
2. Barriers to Using Government Health Insurance and Interest in Low-Cost Non-for-Profit Private Health Insurance in Migrants in Tak Province (Ms. Sasiprapha Chanthawong)
3. Key Persons in the Formation of Civil Society in a Thai Village :A Case of Luwang Udom Village, Muang Ling Sub-district, Chom Phra District, Surin Province (Dr. Yasuyuki Sato)
4. Social Network of Integrated Agriculture Network and Civil Society Movement

- (Dr. Keeratiporn Jutaviriya)
5. Social Capital and Promotion of Good Governance for Waste Management of a Local Administrative Organization A Case Study of Khon Kaen Municipality—
(Dr. Kaeota Chantranuson)
 6. Social Capital of Ban Nong Kham's Civil Community for Managing Community Problems, Kham Kaen Subdistrict, Manchakhiree District, Khon Kaen Province, Thailand
(Dr. Somsak Srisontisuk)
 7. Social Network in Cultural Space of Thai-Laos Border
(Ms. Rukchanok Chumnanmak)
 8. Merit Fund in Social Welfare of Village Communities, Surin Province, Thailand
(Dr. Wilat Phothisan)
 9. Demographical change and Individualization in Japan: Case Study of Funerals for a Human Being and a Pet (Dr. Yoshihide Sakurai)
 10. Civil Society Movement of the Network People Council in Udonthani Province, Thailand (Dr. Prachon Kingminghae)
 11. Empowerment of Community and Commitments to Solve Problem of Violent-oriented Child and Youth in Udonthani Province, Thailand
(Ms. Kunaphen Kingminghae)
 12. Buddhism and social activities in Laos : case studies of two Lao monks
(Mr. Osamu Izumi)
 13. Civil Society Movement and Development in the Periphery of Nation States—Case studies of Okinawa and Thailand—(Mr. Tanapat Jundittawong)
 14. Herbal Production Development in Localization on Community-Based Tourism—A Case Study of Nathong Village, Vangvieng District, Vientiane Province, Lao PDR—
(Dr. Bounxom Syharath)
 15. The Feasibility Study of Sustainable Enhancement of Income Generation Activities through Civil Society Contribution—A Case Study of Handicraft Center, Phone Yeng Village, Keooudom District, Vientiane Province, Lao PDR—(Mr. Somphone Sengaphy)

これらの paper は、2015 年度中に、コーンケン大学より *Civil Society Movement and Development in Northeast Thailand -Public sphere, Social Capital and Prachakhom-*として出版される予定である。

研究代表者の鈴木は、量的データと質的データを用いて東北タイの 2 つの農村(コーンケン県、ウドンタニ県)のプラチャーコム

の調査を行った。コーンケン県の T プラチャーコムは草の根的なプラチャーコムが形成されており、2006 年のクーデターの影響にも揺らぐことはなかった。一方で、ウドンタニ県の P プラチャーコムはタクシン政権時代にトップダウン的に形成されたため、2006 年のクーデター以降はプラチャーコムの活動が衰退していた。このような状況は本研究が開始された 2012 年以降も続いていたが、特にタクシン派(赤服)の影響力の強かった P プラチャーコムでは赤服の集会に参加する者もあり緊張が高まった。赤服の影響が P プラチャーコムほどではなく黄服の影響も多少あった T プラチャーコムでは、2014 年に入って国民国家レベルで緊張が高まった後も比較的平穏であった。2014 年 5 月にふたたびクーデターが発生し、2 つのプラチャーコムとも表面的には平穏を保っている(2015 年 3 月現在)。

しかし、2014 年 8 月から 2015 年 1 月に行った量的調査と質的調査では T プラチャーコムの人々の開発・発展への意識の高さや行動力、他のプラチャーコムとのネットワーキングの強さとそれに比較した P プラチャーコムの弱さが明らかになった。この調査から農村における市民社会形成において、草の根的なプラチャーコムがその基盤となりうることを、2012-2014 年のフィールドワークからも再確認された。

また、鈴木以外の研究分担者、研究協力者、タイ側共同研究者も公共圏、社会関係資本、プラチャーコムをキーワードに市民社会形成に向けた活動などの事例を調査した。クーデターが過去 10 年に 2 度も起こるようなマクロレベルでは政治的非常に不安定な状態であっても、ミクロレベル(プラチャーコム)では様々な市民社会形成への動きがあることが明らかになった。

さらに、近年では東北タイに隣接するラオスにおいて、農村の開発・発展の流れの中で市民社会を模索する動きが出てきた。タイ(特に東北タイ)との学術交流の中でこのような動きが出てきたとの認識からラオス国立大学社会科学部で社会開発の研究を専門とする教員を国際シンポジウムに招聘し、学術交流を行った。東南アジアにおける市民社会形成の動きがグローバルなものとなってきた現状や GMS(大メコン圏)の開発・発展をめぐる新たな動きを研究していく必要性が認識され、今後の共同研究に向けた新たな課題とされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 15 件)

1. 鈴木規之「沖繩とタイ・ラオス 古くて新しいつながり」石原昌英編『沖繩からの

- 眼差し・沖縄への眼差し』沖縄タイムス社、2015年3月、20-36頁。(査読無)
2. Noriyuki Suzuki and Pheuiphet Sadaoheung “The Potential of Community-Based Participation in Social Development in Lao PDR: A Case Study of the International Cooperation Project for Community Health and Education from the University of the Ryukyus-” *Asian Rural Sociology V*, Vol.1, pp. 133-139, 2014. (査読有)
 3. Noriyuki Suzuki “The formation process for Civil Society in Northeast Thailand: From the Social Research of Two Villages” *Proceeding of XVIII ISA World Congress of Sociology*, 11p., 2014. (査読無)
 4. 鈴木規之「現代タイ社会論 グローバル化のなかでのタイ社会の変容」綾部真雄編『タイを知るための72章【第2版】』明石書店、2014年、248-252頁。(査読無)
 5. 櫻井義秀「人口減少社会日本における希望ときずな - しあわせとソーシャル・キャピタル」『宗教研究』88-2、77-104頁、2014。(査読有)
 6. 佐藤康行「タイ農村の経済状況と頼母子講」『タイ国情報』48巻6号、56-69頁、2014。(査読無)
 7. Sato, Yasuyuki “The New Role of Village Health Volunteers in a Changing Thai Village” *Journal of People and Society in Local Culture*, Vol.5, No.1, pp. 64-73, 2014. (査読有)
 8. Sato, Yasuyuki “The New Role of A Leader of Village Health Volunteers in a Changing Thai Village” *Asian Rural Sociology*, Vol.5, No.1, pp. 52-57, 2014. (査読有)
 9. Yoshihide Sakurai and Kazumi Sasaki, 2014, “Chapter 28 Theravada Buddhist Temple Taking Care of People Living with HIV/AIDS in Thailand: A Case Study of Phrabatnampu Temple,” Pranee Liamputtong eds., *Cotemporary Socio-Cultural and Political Perspectives in Thailand*, pp.445-463, Springer, NY. (査読無)
 10. 鈴木規之「越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球」我部政明・石原昌英・山里勝己編『人の移動、融合、変容の人類史 沖縄の経験と21世紀への提言』彩流社、211-225頁、2013。(査読無)
 11. Noriyuki Suzuki, “Dynamics of Civil Society Movement in Northeast Thailand”, *Proceeding of International Conference Thai Studies Through East Wind*, Chiangmai, Thailand, 2013, p.13. (査読無)
 12. 鈴木規之「グローバル化の中での東北タイの市民社会形成とジャパナイゼーション 2010年以降の調査データを中心に」『人間科学』第27号、219-259頁、2012。(査読無)
 13. 佐々木香澄・櫻井義秀「タイ上座仏教寺院と HIV/AIDS を生きる人々 プラバートナンプ寺院を事例に」『年報タイ研究』第12号、21-41頁、2012。(査読有)
 14. 岩佐淳一「地域研究と社会情報学-タイを中心として-」『社会情報学研究』第16巻2号、1-12頁、2012。(査読有)
 15. 岩佐淳一「市民メディアとしての地域メディア-ソーシャルキャピタル論の視角から」『変わりゆくコミュニケーション 薄れゆくコミュニティ-メディアと情報化の現在-』161-184頁、2012。(査読無)
- [学会発表](計10件)
1. Noriyuki Suzuki “The dynamics of the civil society movement from the case study of two villages in Northeast Thailand” 12th International Conference

- on Thai Studies -Thailand in the World-, 22-24 April 2014, University of Sydney, Sydney, Australia.
2. Noriyuki Suzuki “The formation process for Civil Society in Northeast Thailand: From the Social Research of Two Villages” XVIII ISA World Congress of Sociology, 14 July 2014, Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan.
 3. Noriyuki Suzuki, Pheuiphet Sadaoheung “The Potential of Community Based Participation in Social Development in Lao PDR -A Case Study of the International Cooperation Project for Community Health and Education from the University of the Ryukyus-” Asian Rural Sociology V, 2-5 September 2014, National University of Laos, Vientiane City, Lao PDR.
 4. 佐藤康行「変貌するタイ農村における村落保健ボランティアと市民社会の形成」日本タイ学会、2014年7月5日-6日、京都大学。
 5. Sato, Yasuyuki “The New Role of Village Health Volunteers in a Changing Thai Village” Asian Rural Sociology V, 2-5 September 2014, National University of Laos, Vientiane City, Lao PDR.
 6. Noriyuki Suzuki “Dynamics of Civil Society Movement in Northeast Thailand”, International Seminar “Thai Studies Through East Wind”, Chiangmai, Thailand, 24-25 August, 2013.
 7. 鈴木規之「グローバル化の中でのタイ社会の変動と文化変容:市民社会化とジャパナイゼーションの視点から」第85回日本社会学会大会、2012年11月4日、札幌学院大学。
 8. Noriyuki Suzuki “Thailand and Okinawa Towards the Construction of Sustainable Relations within Globalization” The 4th National Congress of Sociology, Thailand, June 18-19, 2012, Bangkok.
 9. 佐藤康行「タイ農村における村落保健ボランティアの新しい役割」第14回日本タイ学会、2012年7月7日、大阪大学(大阪府吹田市)。
 10. 佐藤康行「タイ農村の村落保健ボランティア活動を促進する社会的条件」第85回日本社会学会、2012年11月4日、札幌学院大学(江別市)。
- 〔図書〕(計3件)
1. 櫻井義秀編『タイ上座部仏教と社会的包摂—ソーシャル・キャピタルとしての宗教』明石書店、全356頁、2013。
 2. 櫻井義秀・濱田陽編『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店、全302頁、2012。
 3. Noriyuki Suzuki, Somsak Srisontisuk eds. *Dynamics of Civil Society Movement in Northeast Thailand*, Khonkaen University Book Center, p. 399, 2012.
6. 研究組織
- (1)研究代表者
鈴木 規之 (SUZUKI NORIYUKI)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号: 60253936
 - (2)研究分担者
 1. 佐藤 康行 (SATO YASUYUKI)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号: 40170790
 2. 櫻井 義秀 (SAKURAI YOSHIHIDE)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号: 50196135
 3. 岩佐 淳一 (IWASA JUN-ICHI)
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号: 10232646
 - (3)研究協力者
 1. 浦崎雅代 (URASAKI MASAYO)
 2. 泉経武 (IZUMI OSAMU)